

レオス・カラックス 夜の果てへの旅

LEOS CARAX VOYAGE AU BOUT DE LA NUIT

[上映スケジュール]

3/18 (火)	18:30	若い女 <i>Jeune femme</i> (97分) 上映後 レティシア・ドッシュのトークショーあり suivi d'une discussion avec Laetitia Dosch
3/21 (金)	16:00	ボーイ・ミーツ・ガール <i>Boy meets girl</i> (104分)
	18:30	アネット <i>Annette</i> (140分)
3/22 (土)	12:00	汚れた血 <i>Mauvais sang</i> (119分)
	14:45	ボン・ヌフの恋人 <i>les Amants du Pont-Neuf</i> (125分)
	17:30	若い女 <i>Jeune femme</i> (97分)
	12:45	TOKYO! <i>Tokyo!</i> (110分)
	15:30	ホーリー・モーターズ <i>Holy Motors</i> (115分)
3/23 (日)	18:00	スペシャルトークショー レオス・カラックス×黒沢清 Discussion avec Leos Carax et Kiyoshi Kurosawa
3/28 (金)	15:30	ポーラX <i>Pola X</i> (134分)
	18:30	ホーリー・モーターズ <i>Holy Motors</i> (115分)
	11:30	ボン・ヌフの恋人 <i>les Amants du Pont-Neuf</i> (125分)
3/29 (土)	14:30	映画のアトリエ「レオス・カラックスとは“何”か？」講師:須藤健太郎 Atelier cinéma par Kentaro Sudoh
	17:00	ポーラX <i>Pola X</i> (134分)
	11:00	TOKYO! <i>Tokyo!</i> (110分)
3/30 (日)	13:30	ボーイ・ミーツ・ガール <i>Boy meets girl</i> (104分)
	16:00	アネット <i>Annette</i> (140分)
	19:00	汚れた血 <i>Mauvais sang</i> (119分)

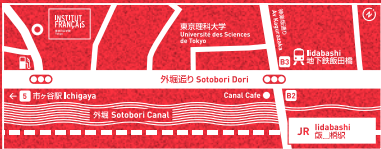
入場料金:一律 1,100 円 (全席自由 / チケット番号順)
Peatix (<https://ifjtokyo.peatix.com/events>) にて発売中。
窓口販売はございませんのでご注意ください | 上映開始 15 分前開場 | 上映開始 10 分後以降の入場はご遠慮下さい



レオス・カラックス監督最新作
イツ・ノット・ミー
It's Not Me
[2024 年 / 42 分 / フランス]
4月26日から
ユーロスペースほか全国公開
www.eurospace.co.jp/itsnotme/

FESTIVAL DU FILM FRANÇAIS
横浜フランス映画祭2025
会期 **25年3月20日**(木・祝) — **23日**(日)
開場 **横浜みなとみらい21 地区**
<https://unifrance.jp/festival/2025/>

レオス・カラックス 夜の果てへの旅
主催・会場:東京日仏学院 | 助成:CNC
特別協力:agnès b.、ユニフランス、ユーロスペース
協力:ビターズ・エンド、フェスティヴァル・エイジェンシー、サンリスフィルム
Leos Carax voyage au bout de la nuit
Organisé par l'Institut franco-japonais de Tokyo
Avec le soutien du CNC | Remerciements : agnès b., Bitters End, Eurospace, Festival Agency, Senlis Films, Unifrance
[会場・お問い合わせ]
東京日仏学院
〒162-8415 東京都新宿区市谷船河原町15
TEL 03-5206-2500 / FAX 03-5206-2501



LEOS CARAX
VOYAGE
AU BOUT DE
LA NUIT

Programme associé du Festival du Film Français de Yokohama



2025/ **3/21** (金) — **3/30** (日) *金・土・日の開催

主催・会場 **東京日仏学院**
du 21 au 30 mars 2025 à l'Institut français de Tokyo

レオス・カラックス
夜の果てへの旅

〔横浜フランス映画祭2025関連企画〕



レオス・カラックス 夜の果てへの旅

LEOS CARAX VOYAGE AU BOUT DE LA NUIT

フランス映画において唯一無二なる存在、レオス・カラックスは、1980年の初短編作品『絞殺のブルーズ』で鮮烈な監督デビューを飾り、1984年の初長編作品『ボーイ・ミーツ・ガール』から2021年の初ミュージカル『アネット』まで、一作ごとに映画と出会い直し、創造の冒険を行い、6本の傑作を生み出してきました。そのレオスが最新作『It's Not Me イッツ・ノット・ミー』とともに戻ってきます。レオスによる映画史、レオスが思考し続ける世界のテーマ、レオスを魅了し、形成してきた監督へのオマージュ、そして俳優たち、家族への愛…。それら全てが凝縮された『It's Not Me イッツ・ノット・ミー』が横浜フランス映画祭で日本プレミア上映されるのを記念してこれまでの6作品を一挙特集します。会期中にはレオス・カラックス監督と黒沢清監督のトークショー、カラックス映画の全貌に迫る須藤健太郎氏によるレクチャーも開催します。



© THEO FILM

ボーイ・ミーツ・ガール *Boy Meets Girl*

[1984年/フランス/104分/モノクロ/35mm]

監督・脚本 レオス・カラックス

撮影 ジャン＝イヴ・エスコフィエ

出演 ミレーユ・ペリエ、ドニ・ラヴァン、エリー・ボワカル

4年にカンヌの映画祭で上映され“恐るべき子ども”と一躍脚光を浴びた、カラックス22歳の長編デビュー作。5月のパリの夜、失恋したばかりの少年アレックスが美しい少女ミレーユと出会い、やがて悲劇的な結末を迎えるまでを、ベルベットのように艶やかなモノクローム映像で綴る。夜闇にうかぶ街の光が宝石のように刻まれた画面は、フィルム・ノワールやヌーベルヴァーグの雰囲気を漂わせながら、まぎれもなく80年代の精神の声を伝えている。

汚れた血 *Mauvais Sang*

[1986年/フランス/119分/カラー/35mm]

監督・脚本 レオス・カラックス

撮影 ジャン＝イヴ・エスコフィエ

出演 ジュリエット・ピノシュ、ドニ・ラヴァン、ミシェル・ピコリ

ドニ・ラヴァンが再び主人公“アレックス”を演じ、永遠に結ばれることのない男女の三角関係をスピーディかつリリカルに描く。愛のないセックスで感染する病気が蔓延するパリ。新しい人生を望むアレックスは、亡き父の友人マルクから犯罪に誘われるが、やがてマルクの愛人アンナに惹かれてゆく…。デヴィッド・ボウイの「モダン・ラブ」が流れる中を駆け抜ける長廻し撮影、ラストのアンナの疾走などは映画史に残り名シーンと名高い。

ボンヌフの恋人 *Les Amants du Pont-Neuf*

[1991年/フランス/125分/カラー/35mm]

監督・脚本 レオス・カラックス

撮影 ジャン＝イヴ・エスコフィエ

出演 ジュリエット・ピノシュ、ドニ・ラヴァン、クラウス＝ミヒャエル・グラーバー、ダニエル・ビュアン

パリで一番古い橋“ボンヌフ”で暮らす天涯孤独な青年アレックスは、恋の痛手と生涯治る見込みのない目の病で絶望的な放浪の毎日を送っている空軍大佐の娘ミシェルに出会う。二人は橋の上での生活を送るうち次第に心惹かれ合うようになるのだが、ミシェルには両親から搜索願いが出されていた…。『『ボンヌフの恋人』は20年代の『サンライズ』や『都会の哀愁』、60年代の『ブレイタイム』や『アルファヴィル』のように、90年代の偉大な都市についての表現主義的ファンタジーとよべるだろう』ジョナサン・ローゼンバウム

ポーラX *Pola X*

[1999年/フランス・ドイツ・日本・スイス/カラー/134分/35mm]

監督・脚本 レオス・カラックス

撮影 エリック・ゴートイエ

出演 ギョーム・ドバルデュー、カテリーナ・ゴルベワ、カトリーヌ・ドヌーヴ

ハーマン・メルヴィルの小説『ピエール』を映画化。虚飾の人生の中で真実を渴望する小説家のピエールと、謎の女イザベル。ピエールは姉かも知れぬイザベルとの愛を求め、美しい母と婚約者の満ち足りた生活を捨て、魂の暗闇に落ちてゆく。闇の中の官能的なベッドシーン“血の河”に溺れる夢など、今まで以上に強烈な闇のイメージによって破壊に向かう男の魂を描き、カラックスが新境地を開いた作品。



© 2008「TOKYO!」

TOKYO! *Tokyo!*

[2008年/フランス・日本・韓国/110分/カラー/35mm]

監督 レオス・カラックス、ミシェル・ Gondrier、ボン・ジュノ

出演 ドニ・ラヴァン、加瀬亮、藤谷文子、蒼井優、香川照之

3人の鬼才監督が東京を舞台にした物語を競作。生きることに思い悩む女性の体が徐々に木になっていく「インテリア・デザイン」(ミシェル・Gondrier監督)、下水道から現れる謎の怪人が街を恐怖に陥れる「メルド」(レオス・カラックス監督)、10年間引きこもっていた男が、恋する女性を追って外界に足を踏み出す「シェイキング東京」(ボン・ジュノ監督)の3作で構成。

「モンスターは実際の社会現象を浮き立たせる。そしてモンスターが出てくる下水は、ある種、過去の記憶の隠喩であるんだ」レオス・カラックス

ホーリー・モーターズ *Holy Motors*

[2012年/フランス/115分/カラー/DCP]

監督・脚本 レオス・カラックス

撮影 キャロリーヌ・シャンプティエ

出演 ドニ・ラヴァン、エディット・スコブ、エヴァ・メンデス、カイリー・ミノグ、ミシェル・ピコリ

銀行家、殺人者、物乞いの女、父親…。いくつもの“人生のアバター”を演じながら、白いリムジンでパリの街中を駆けぬげるオスカーの1日。なぜ彼は、誰かの人生を演じ続けるのか？ ドニ・ラヴァンの躍動する身体とシャンプティエの撮影によって、カラックスは自身の夢のヴィジョンからミステリアスな物語を生み出した。スパークスの音楽やカイリー・ミノグが生で歌うミュージカルシーンなど、最新作『アネット』誕生の端緒を見ることができる。

アネット *Annette*

[2021年/フランス・ドイツ・ベルギー・日本・メキシコ合作/140分/カラー/DCP]

監督 レオス・カラックス

原案・音楽 スパークス | 歌詞 ロン・メイル、ラッセル・メイル&LC

出演 アダム・ドライバー、マリオン・コティヤール、サイモン・ヘルバーク

ロサンゼルス。攻撃的なユーモアセンスをもったスタンダップ・コメディアンのヘンリーと、国際的に有名なオペラ歌手のアン。“美女と野人”とはやされる程にかけ離れた二人が恋に落ち、やがて世間から注目されるようになる。だが二人の間にミステリアスで非凡な才能をもったアネットが生まれたことで、彼らの人生は狂い始める。第74回カンヌ国際映画祭監督賞受賞。

『『アネット』は、スパークスの世界と、完全なミュージカル映画を長年夢見てきたカラックスの映画的欲望を融合させた傑作である』オリヴィエ・パール



© 2020 CG Cinéma International / Théo Films / Tribus PFilms International / ARTE France Cinéma / UGC Images / DETAILFILM / EUROSPACE / Scope Pictures / Wrong men / Ritf (Télévisions belge) / Piano

3 18(火) | 18:30

レティシア・ドツシュを迎えて *Rencontre avec Laetitia Dosch*

横浜フランス映画祭2025にて監督・主演作『犬の裁判』(2025年5月下旬日本公開予定)が上映される女優で映画監督、舞台演出家、ダンサーのレティシア・ドツシュをお迎えし、トークショーを行います。その多彩な活動の原点、インスピレーションについてお話しいたできます。トークに先立ち、レティシア・ドツシュが主演し、リュミエール賞最有望女優賞を受賞した『若い女』を特別上映します。



© 2017 Blue Monday Productions

レティシア・ドツシュ *Laetitia Dosch*

1980年フランス生まれ。俳優、ダンサー、作家、演劇監督。パリの演劇学校を経て、スイス・ローザンヌの舞台芸術高等教育学校にて学ぶ。映画ではジュスティヌ・トリエ監督『ソルフェリーノの戦い』(13)で一躍注目を集める。そのほかダニエル・アービッド監督『シンプルな情熱』(20)、アルノー&ジャン＝マリー・ラリュエ監督の『ジムの物語』(24)など女優として活躍するかたわら、演出家として馬と共演する舞台『Hâte』や、ラジオのエコロジー番組『Radio Arbres』を制作。フランスでいま最も注目されるアーティストのひとり。初監督作品『犬の裁判』は5月下旬、シネスイツチ銀座・UPLINK吉祥寺他にて全国順次公開(配給:オンリー・ハーツ)。



若い女 *Jeune Femme*

[2017年/フランス/97分/カラー/DCP] 配給:サンリスフィルム

監督:レオノール・セライユ | 出演:レティシア・ドツシュ、グレゴワール・モンサンジョン、ナタリー・リシャール

30年代の女性ポーラは、著名カメラマンの恋人とメキシコから久しぶりにパリに戻るも、その彼と喧嘩をしてアパートメントを追い出され、友人たちからも見放され、仕事もなく、一文無しのまま猫を抱えて路頭に迷う。人も街もよそよこしく、絶望しかかった時に、ある偶然の間違いから、周囲の世界との接点を見出していく。新人女性監督レオノール・セライユのカヌ国際映画祭カメラドール2017年(新人賞)受賞作品。冒頭からレティシア・ドツシュが文字通り体当たりで、世界と対峙していくその様からとにかく目が離せない。